

歴史を語る建物たち

庄内編
(第1回)

今日、20世紀型の開発優先社会は終焉を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

日和山六角灯台 (酒田市)



日本公園緑地協会が選定する「日本の都市公園100選」にもなっている日和山公園の一角に、六角形をした西洋風の白い木造灯台が建っている。明治28年に建造され、昭和33年まで現役の灯台として活躍した初代酒田灯台（現在の酒田灯台は3代目）で、昭和63年に山形県の指定有形文化財となった。地元では「六角灯台」として親しまれている。

棟梁は相馬楼と同じ

酒田における灯台の歴史の幕開けは、明和4年(1767年)、「公益の祖」と呼ばれる本間光丘が私費で最上川の河口部に常夜灯を建てたことに始まるといわれている。

時は流れて明治28年10月、最上川左岸の宮野浦に、高さ約12mの初代酒田灯台（六角灯台）が建てられた。棟梁は佐藤泰太郎である。

世界的数学者の小倉金之助をいここに持つ佐藤は、ほぼ独学で大工の知識を学び、若い時から棟梁としての腕を発揮した。六角灯台を建てたのは、佐藤が34歳のときである。

ちなみに、佐藤が建てた建物は、明治27年に酒田を襲った大地震でも倒れずに残ったものが多かった。大地震で最も被害が大きかった酒田市中心部の船場町で3つ残った土蔵は、すべて佐藤が建てたものであった。おそらく、佐藤も数学的センスを持ち合わせており、それを耐震に生かしたのだろう。



大浜に移転した頃の六角灯台（大正期撮影）。手前の民家は灯台守の住宅だろうか。
出典：『目で見える酒田市史』（酒田市）

なお、相馬屋（現在の相馬楼）や山王くらぶといった、酒田を代表する料亭も佐藤の作品である。

六角灯台はその後、大正2年（最上川右岸）と同12年（大浜）に2度移転され、酒田の海上安全の役割を果たしてきたが、昭和33年、少し離れた高砂に新しい灯台が建てられると、63年の現役生活を終えた。

解体しないで日和山に移転した

不要になった六角灯台は、取り壊しの方向で検討されていた。それに待ったをかけたのが市民であった。しかし、保存するためには約50万円かかるということだった。大卒の初任給が1万3千円強の時代だったので、大変な金額であった。

そこで、酒田市中心部の下中町で穀物商を営んでいた佐藤三郎氏（故人）らが中心となって、町内会組織を活用するなどして市民から約43万円の募金を集めた。それを持って当時の市長と市議会議長に掛け合ったところ、不足分は市が補うことで日和山公園への移転保存が決まった。なお、佐藤氏は老朽化した市役所の建て替え（昭和35年ごろ）に関しても、当初優勢だった郊外建設案を30cmもの分厚い署名簿で覆し、市の中心部である現在地での建設を実現させた中心人物である。

六角灯台の移転では、まず大型の船で港をさかのぼり、船場町で陸揚げし、そこからウインチなどで現在地に運んだ。つまり、解体して復元するのではなく、そのまま移転したのである。それがいかに大変な作業であったかは想像に難くない。結局、費用は募金額の2倍かかったようだ。

なお、昭和58年に発行された『酒田市制50年』で佐藤氏は、「今、酒田の名所になっているこの灯台が、当時市民の多くの協力によってできたことが忘れられていくことは、募金の責任者として誠に申し訳なく、このことをどうかページに加えていただければ」との文章を寄せている。

日本最古？日本最古級？

さて、明治28年建造の六角灯台は、長らく「現存する日本最古の木造灯台」と称されてきた。しかし、昭和55年に「もっと古い木造灯台がある」というハガキが市に届いたと、旧運輸省酒田支局長を務めた中山岩男氏が、著書『酒田港回想』で述懐している。

明治建築研究所（当時）から届いたハガキによれば、東京の「船の科学館」に保存されている旧案乗崎灯台（三重県志摩半島）が明治6年の建造で、現存する木造灯台では最も古いという。しかし、中山氏は著書の中で、「案乗崎は八角形、酒田は六角形で形状が違う。別の構造物と考えれば、六角形の灯台としては酒田が最古といっても差し支えないのではと考える」と、持論を展開している。

もっとも、今日では、大阪府堺市に残る木造六角形

の旧堺灯台（国指定史跡）が、明治10年建造で酒田よりも古いことが分かっており、堺市のホームページでも「現地に現存する日本最古の木造洋式灯台」と紹介されている。一方、酒田市のホームページでは「日本最古級の木造六角灯台」と紹介されており、他の観光情報もそれに倣っている。

とはいえ、たとえ最古であろうとなかろうと、120年余りの歴史を持つ旧酒田灯台（六角灯台）の価値が変わるものではない。

「市民の財産」を守る責任

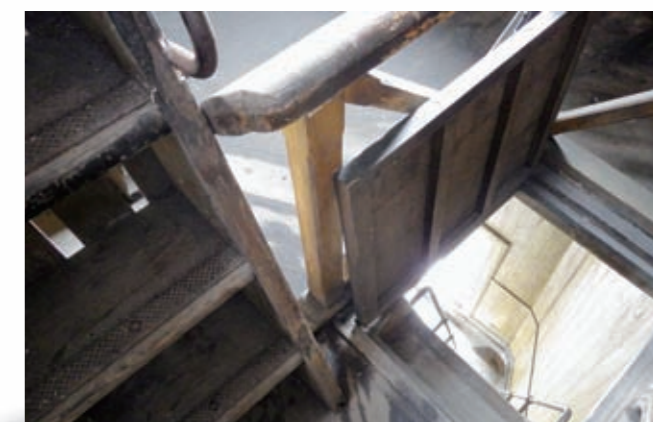
六角灯台の内部は安全面から見学できないが、夜はランプがともされ、往時の姿をしのぶことができる。また、オレンジ、青、紫、緑の4色でライトアップされる姿は非常に幻想的だ。ライトアップは、昭和63年の桜まつりを盛り上げるため、東北電力がイベント的に始めたものであるが、平成2年からは市が常設で行っている（いつから4色になったのかは明らかでない）。

なお、六角灯台はCMに登場したことはあるが、ドラマや映画などで本格的なロケが行われたことはほとんどない。六角灯台を管理する市都市計画課では、「バックに日本海が見えるので景観もいい。観光PRにもなるのでロケは歓迎」と意欲を見せる。

今後についても、市では基本的に保存していく方針だ。市都市計画課は、「六角灯台は、市の指定文化財（名勝）でもある日和山公園を構成するオブジェとして欠かせない存在。同時に、酒田市のシンボリックな存在でもある」と強調する。そして、「六角灯台は市民の陳情によって解体を免れた。いわば、六角灯台は市民の財産であり、これからも大事に守っていきたい」と責任感のぞかせる。

六角灯台はまさしく、市民と行政の情熱が重なることによって、歴史ある建物が残される好例である。そのことに市民はもっと誇りを持ってよい。

（東北公益文科大学特任講師・山口泰史）



灯台内部は三層式になっている。階段は非常に急で、手すりの付いたはしごのようだ。今回の取材のために特別に入らせていただいた。（筆者撮影）